



福岡医発第 0482 号 (地)

平成 27 年 5 月 14 日

各 医 師 会 長 殿

福 岡 県 医 師 会

会長 松 田 峻一良

(公印省略)

日本医師会認定健康スポーツ医制度再研修会

(第 13 回福岡スポーツ研究会) の開催について (ご案内)

標記日医認定健康スポーツ医制度再研修会が、福岡スポーツ研究会の主催で別紙日程のとおり開催されますのでお知らせいたします。

なお、

- 1) 本研修会は、認定健康スポーツ医の更新のための再研修会 1 単位となります。
- 2) 認定健康スポーツ医の先生方には、本会より直接ご案内申し上げております。

小郡三井医師会より

学術担当理事 権藤秀之
会長 廣瀬真恵

第13回 福岡スポーツ研究会

謹啓

時下、先生方におかれましては益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。
さてこの度、下記要領にて「第13回福岡スポーツ研究会」を開催することとなりました。
ご多忙とは存じますが、ご出席賜りますようお願い申し上げます。

謹白

当番代表世話人 岩本 幸英
代表世話人 内藤 正俊

記

【日時】平成27年7月11日(土)17時00分～20時30分

【会場】ホテルセンラーザ博多 3階「花筐の間」
福岡市博多区博多駅中央街4-23 TEL 092-461-0111

【一般演題】17時10分～17時50分

座長 福岡大学整形外科学 教授 内藤 正俊 先生

【特別講演】18時00分～19時00分

座長 九州大学大学院医学研究院整形外科学 教授 岩本 幸英 先生

『2020年東京五輪・パラリンピックを見据えて
ースポーツ障害・事故の予防と健康スポーツ医学の実践ー』

日体大総合研究所所長/日本体育大学保健医療学部教授 武藤 芳照先生

会終了後、情報交換会をご準備致しております。

☆日本整形外科学会教育研修会＊申請中
(単位受講費として1,000円)

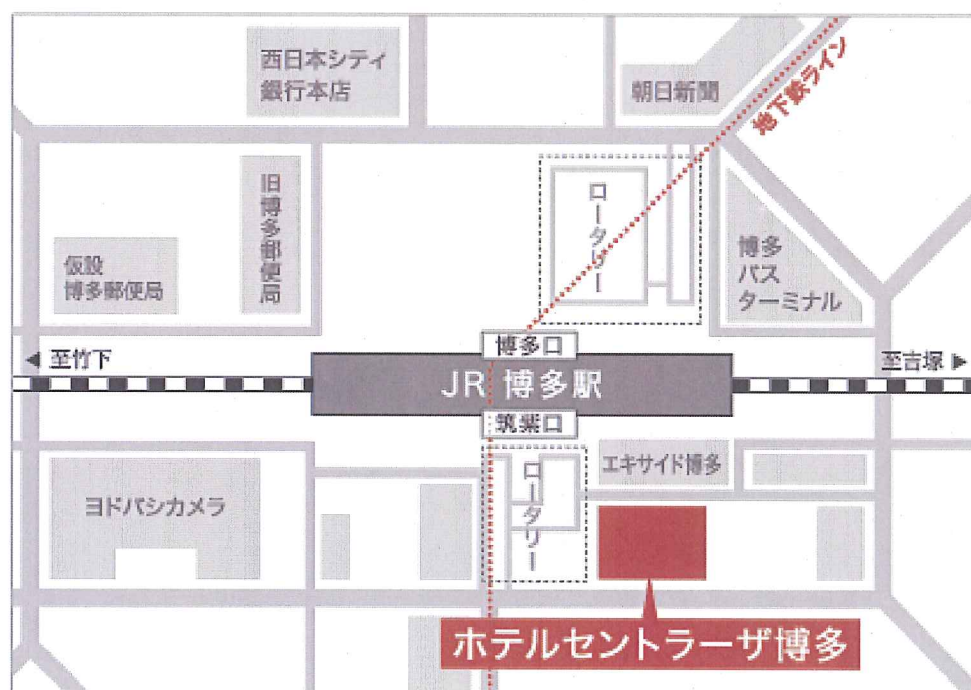
☆日本医師会認定健康スポーツ医再研修会1単位
＊参加費無料

共 催 福岡スポーツ研究会

ホテルセントラーザ博多

〒812-0012 福岡県福岡市博多区博多駅中央街4-23

TEL 092-461-0111



武藤芳照（むとう よしてる）

【現職】

（学）日本体育大学 日体大総合研究所所長、日本体育大学保健医療学部教授、
東京大学名誉教授 総長顧問

【略歴】

昭和25（1950）年愛知県大府市生まれ。愛知県立刈谷高校卒業。昭和50（1975）年名古屋大学医学部卒業後、東京厚生病院整形外科医長を経て、昭和56（1981）年より東京大学教育学部助教授、平成5（1993）年同教授、平成7（1995）年同大学院教授、平成20（2008）年同大学院教育学研究科副研究科長、平成21（2009）年4月より同研究科長・学部長。平成23（2011）年4月より東京大学理事・副学長・東京大学政策ビジョン研究センター教授。平成24（2012）年6月東京大学名誉教授。平成25（2013）年4月より日体大総合研究所所長。平成26年（2014年）4月 日本体育大学保健医療学部教授。

医学博士。（財）日本体育協会公認スポーツドクター。日本医師会認定健康スポーツ医。ロサンゼルス（1984年）・ソウル（1988年）・バルセロナ（1992年）各オリンピック水泳チームドクターを経て、国際水泳連盟医事委員（1992年～2000年）を務める。（公財）日本水泳連盟評議員。

日本整形外科学会スポーツ医学部 2008 年学術集會会長、日本整形外科学会スポーツ医学部会議員、監事。公益財団法人身体教育医学研究所名誉所長、一般財団法人運動器の10年・日本協会理事。NPO 法人 水と健康スポーツ医学研究所副理事長、日本転倒予防学会理事長、「健康のため水を飲もう」推進委員会（厚生労働省健康局後援）委員長。島根県雲南市名誉顧問。一般財団法人少林寺拳法連盟顧問。

【主な編著書、訳書】

A スポーツ障害関係

- 『新 スポーツトレーナーマニュアル』（鹿倉二郎、小林寛和と共編）南江堂、2011
- 『スポーツ医学実践ナビースポーツ外傷・障害の予防とその対応』（編著）日本医事新報社、2009
- 『スポーツ傷害のリハビリテーション—Science and Practice—』（山下敏彦と共編）金原出版、2008
- 『学校における運動器検診ハンドブック—発育期のスポーツ傷害の予防—』（柏口新二、内尾祐司と共編）南江堂、2007
- 『疲労骨折』（編）文光堂、1998
- 『スポーツ障害のメカニズムと予防のポイント』（編著）文光堂、1992
- 『スポーツ救急の実際』（浅井利夫と共編）中外医学社、1991
- 『スポーツと疲労骨折』（伊藤晴夫、片山直樹と共編）南江堂、1990
- 『スポーツトレーナーマニュアル』（村井貞夫、鹿倉二郎と共編）南江堂、1996
- 『コーチングマニュアル スポーツ傷害』（高岸憲二と共監訳）大修館書店、1991
- 『スポーツ痛5段階解決法 イーベテック』（宮下充正と共監訳）ブックハウスHD、1984
- 『ドミンゲス博士のスポーツ医学百科』（監訳）ブックハウスHD、1982

B 水泳関係

- 『水泳プールでの重大事故を防ぐ』（日本水泳連盟編、企画・構成担当）ブックハウスHD、2007
- 『水泳の医学』ブックハウスHD、1982
- 『水泳の医学Ⅱ』ブックハウスHD、1989
- 『水泳療法の理論と実際』（宮下充正と共編著）金原出版、1983
- 『健康スイミングのしかたと効果』築地書館、1985
- 『ダッフィールド・水治療法』（宮下充正、石原俊樹と共訳）杏林書院、1984

C 運動処方・運動療法関係

- 『「転ばぬ体操」で100歳まで動ける』（監修）主婦の友社、2014
- 『いくつになっても転ばない 5つの習慣』青春出版社、2013
- 『転倒予防—転ばぬ先の杖と知恵—』（岩波新書）、岩波書店、2013
- 『これだけは知っておきたい「転倒予防の心がけ」』有限責任事業組合ブックエンド、2012
- 『運動療法ガイド（改訂第5版）』（監修）日本医事新報社、2012
- 『変形性股関節症の運動・生活ガイド』（第4版）（松田達男、田中尚喜と共編）、2011
- 『認知症者の転倒予防とリスクマネジメント—病院・施設・在宅でのケア—』（鈴木みずえと共編）日本医事新報社、2011
- 『ここまでできる高齢者の転倒予防』（総監修）日本看護協会出版会、2010
- 『転倒予防からくらく実践ガイド』（監修）学習研究社、2009
- 『転倒予防医学百科』（編）日本医事新報社、2008
- 『腰痛の運動・生活ガイド 運動療法と日常生活動作の手引き（第4版）』（菊地臣一、伊藤晴夫と共編著）日本医事新報社、2007
- 『運動療法ガイド（改訂第4版）』（井上一、福田潤と共編著）日本医事新報社、2006
- 『高齢者指導に役立つ転倒予防の知識と実践プログラム』（総監修）日本看護協会出版会、2006
- 『患者指導のための水と健康ハンドブック—科学的な飲水から水中運動まで—』（太田美穂、田澤俊明、永島正紀と共編）日本医事新報社、2006
- 『乳がん治療をめぐる運動生活ガイド—検診からリハビリまで—』（岡崎邦泰、森本忠興と共編）日本医事新報社、2006
- 『転倒・骨折を防ぐ 簡単！運動レシピ』（監修）主婦の友社、2005
- 『介護者の腰痛予防—腰を守るための介護姿勢と環境整備』（田島寛、山田均、黒柳律夫と共編）日本医事新報社、2005
- 『変形性股関節症の運動・生活ガイド』（第3版）（杉岡洋一、岩田久、伊藤晴夫と共編）日本医事新報社、2004
- 『転倒予防教室—転倒予防への医学的対応—』（改訂第2版）（黒柳律雄、上野勝則、太田美穂と共編）日本医事新報社、2002
- 『武藤教授の転ばぬ教室—寝たきりにならないために— 暮らしの手帖』2001
- 『乳がん術後の運動・生活ガイド』（岡崎邦泰、森本忠興と共編）日本医事新報社、2001
- 『運動療法ガイド（改訂第3版）』（井上一、福田潤と共編著）日本医事新報社、2000
- 『転倒予防教室—転倒予防への医学的対応—』（黒柳律雄、上野勝則、太田美穂と共編）日本医事新報社、1999
- 『変形性股関節症の運動・生活ガイド』（杉岡洋一、岩田久と共編）日本医事新報社、1999
- 『新・子どものスポーツ医学』（井形高明、浅井利夫と共編）、南江堂、1998
- 『中高年のスポーツ医学』（田島直也、佐野忠弘と共編）南江堂、1997
- 『変形性脊椎症の運動・生活ガイド』（菊地臣一、伊藤晴夫と共編）日本医事新報社、1998
- 『女性のスポーツ医学』（越野立夫、定本朋子と共編）南江堂、1996
- 『変形性膝関節症の運動生活ガイド』（杉岡洋一、伊藤晴夫と共編）日本医事新報社、1997
- 『スポーツ医学からみた年代別、性別スポーツ指導』（編）文光堂、1994
- 『運動療法ガイド』（宮下充正と共編）日本医事新報社、1990
- 『子どものスポーツ医学』（宮下充正、小林寛伊と共編）南江堂、1987

D 身体教育学関係

- 『健康のため水を飲もうー水分不足が引き起こす悲劇を防ぐためにー』水道産業新聞社、2010
- 『学校の運動器疾患・障害に対する取り組みの手引き』(企画・構成) 日本学校保健会、2009
- 『新訂現代身体教育論』(衛藤隆、山本義春と共編著) 放送大学教育振興会、2006
- 『よみがえれ風の子ー子供の体の育み方ー』中央公論新社、2002
- 『疲れる理由ー現代人のための処方せんー』(山本義春と共監訳) 日経BP、2000
- 『けが、故障を防ぐ部活指導の新視点』(太田美穂と共編著) ぎょうせい、1999
- 『からだを育む』(太田美穂と共著) 丸善、1997
- 『からだの理』(編) 丸善、1996
- 『子どものスポーツ』東京大学出版会、1989
- 『子どもの成長とスポーツのしかた』(深代千之、深代泰子と共著) 築地書館、1985
- 『スポーツ少年の危機』朝日新聞社、1985
- 『スポーツ部活』(今橋盛勝、朴量俣、藤田昌士と共編著) 草土文化、1987
- 『小・中学生への気になるスポーツ指導』草土文化、1988
- 『高齢者とスポーツ』(宮下充正と共編著) 東京大学出版会、1986
- 『女性のためのフィットネス・スポーツ』(高本美和子、谷口有子と共著) 築地書館、1987
- 『女性のスポーツ事典』(編著) 三省堂、1989
- 『からだと健康の関連を学ぶ教材/スクールウェルネス基礎編』CD-ROM
(衛藤隆、斎藤昇と共監修) 三菱総合研究所、1999

E 絵本・学習参考書等

- ・『おーい、フクチン!おまえさん、しあわせかい?ー54匹の置き去りになった猫の物語ー』帯紙推薦文:武藤芳照、(株)ブックエンド、2014
- ・『水と健康ー水で生きている体と心ー』監修 武藤芳照、日本医師会、日本学校保健会、まんが:二階堂正宏、赤塚不二夫、吉勝太とフジオプロ、野地文沙子、所ゆきよし、柚月ナナ、いわみせいじ、あべさより、ちばてつや、制作 (株) かまくら春秋社、2014
- ・『転倒予防いろはかるた』(企画・監修)、日本看護協会出版会 2012
- ・『水分と体ー体は水でできているー』(監修 日本医師会、日本学校保健会)、構成 武藤芳照、まんが:鈴木太郎、やなせたかし、幸月さち子、制作 (株) かまくら春秋社、2009
- ・『体動かせ いっぱい遊べ』(監修 日本医師会、日本学校保健会)、構成 武藤芳照、まんが:間部正志、赤塚不二夫、あべさより、制作 (株) かまくら春秋社、2008
- ・『マンガ運動器のおはなしー大人も知らないからだの本ー』編集、学習研究社、2005
- ・からだの物語シリーズ、学習研究社
 - 『①血液』『②骨』『③皮ふ』『④目・耳・鼻・口』、2002
- ・『SOS 救急隊:血液編、骨編、皮膚編』(監修)、(財)東京救急協会、2001
- ・スポーツを科学するシリーズ (全5巻) 監修、大月書店、1996
 - 『からだが動くメカニズム』
 - 『からだはまだ未だ未完成』
 - 『トレーニングに科学を』
 - 『スポーツ障害を知る』
 - 『スポーツは科学だ』
- ・からだを知る本シリーズ (全12巻)、監修、草土文化
 - 『からだを知る本1ーがいこつだぞー骨と筋肉』1990
 - 『からだを知る本2ーむし歯はいやだよー歯』1990
 - 『からだを知る本3ーあつ血が出ているー血と血管』1991
 - 『からだを知る本4ーおしっここのふしぎー尿と腎臓』1991
 - 『からだを知る本5ー胸がドキドキー心臓と肺』1991
 - 『からだを知る本6ー食べ物とうんちー消化器と肝臓』1991
 - 『からだを知る本7ー見える?見えたー目』1991
 - 『からだを知る本8ー聞いたり、かいだりー耳と鼻』1992
 - 『からだを知る本9ーおはだはすべすべかー皮膚』1992
 - 『からだを知る本10ーいのちってなんだー生命と細胞』1992
 - 『からだを知る本11ー脳みそは考えたー脳と神経』1992
 - 『からだを知る本12ーおとなに聞きにくい話ー性と生殖』1992
- ・じょうずになろうシリーズ (全5巻)、評論社
 - 『じょうずになろう およくこと』1981
 - 『じょうずになろう とぶこと』(深代千之と共著) 1982
 - 『じょうずになろう なげること』(平野裕一と共著) 1984
 - 『じょうずになろう けること』(小田伸午と共著) 1986
 - 『じょうずになろう はしること』(八田秀雄と共著) 1986

【受賞】

- ・第5回ノバルティス・メノポーズ・アワード受賞
「中高年女性の転倒・骨折予防の研究及び実践活動」(2000年8月)
- ・平成12年度整形災害外科学研究助成財団・アルケア奨励賞受賞
「高齢者の転倒・骨折の内的危険因子及びその予防のための医学的対応の検討」(2001年1月)
- ・第1回三井住友海上福祉財団賞(高齢者福祉部門・著作)
『武藤教授の転ばぬ教室ー寝たきりにならないためにー』(2003年3月)
- ・財団法人日本水泳連盟有功章(2010年9月)
- ・公益社団法人日本医師会優功賞(2013年11月)

(平成26(2014)年9月9日現在)

2020年東京五輪・パラリンピックを見据えて
ースポーツ障害・事故の予防と健康スポーツ医学の実践

2020年東京五輪・パラリンピックの開催を見据えて、我が国のスポーツ及びスポーツ医学のあり方について思索し、充実・発展させる誠に良い機会だろう。

社会におけるスポーツ構造としては、いわば「スカイツリー型」ではなく、「富士山（ピラミッド）型」のスポーツ構造を目指すべきと考える。前者は、競技志向を主体として、ひたすら上へ上へ競技レベルの高さを求め、「金メダル」に象徴される勝利・成功を目標とするもの。

後者は、幅広くバランスの良い裾野を有し、着実に多彩なスポーツ人口の底辺を広げて、それを基盤に順次競技レベルの向上を図るものである。この措置を形成することにより、スポーツ選手はもとより、子どもから高齢者まで障害・疾病のある者まで含めて、それぞれの個の特性に即したスポーツの質・量を定めた安全で合理的な指導が確立され、結果、スポーツ外傷・障害・重大事故を低減させ、一人ひとりの健康と幸福に結びつく健全なスポーツ・運動・身体活動が、社会に定着し、それこそが優れた「オリンピック・レガシー（遺産）」として残ることを希望している。